

は、直面した者でなければとうてい理解出来まい。失業した日本人に追打ちをかけての超インフレ、卵一個十銭だったのが千円に、豚肉百匁一円二十銭が一萬二千円に暴騰した。日本人は帰国までの食いつなぎに必死。暴動、略奪が起きなかつたのが、せめてもの幸せだった。立場の逆転した今は、いつ中国人に呼び出されるかの不安は一瞬たりと脳裏から離れない。現に連れ去られた人達は、われわれが石門を去る日まで、遂に姿を現わさなかつた。

二十一年二月、引揚げのため、住民一千五百人無蓋車に乗り出発した。途中種々トラブルもあったが、長辛店、天津の収容所生活を経て塘沽から米艦LSTに乗り、二十一年五月二十七日佐世保に入港、石門出発以来四か月振りに緑したたる懐かしい祖国に第一歩をしろした。

北京より帰る

愛知県 長谷部 福美

支那事変も日を経るに従い、日本軍が中国の奥地に進出、その後方を守り固めるかたちで日本から移民を続々と送り込んだ。北京・天津等の主要都市には昭和十四年頃には、数万人の居留民がそれぞれの業務を行い、その子弟の教育機関も整備されてきた。

昭和十四年五月、愛知県より北京日本大使館に向を命ぜられ、六月七日、北京駅に降り、目前に正陽門を見る。日本大使館に出頭、北京日本青年学校に配属される。

学校は西城にあり、旧兵舎を改造したものであった。その後四年半、昼は普通科、夜は本科と日本内地と同じ教育であった。

昭和十九年一月、中華航空株式会社（日本の国策会社）が私立の青年学校を建てる要員として採用され、

公立の教員を退職した。

校務に慣れた頃、突然総裁より呼び出され、航空燃料の製造を命ぜられる。戦局は日増しに苛烈となり、航空燃料が枯渇し、その補充を緊急に求められる状況になったので、ドイツで発明された植物油より航空燃料を精製する方法を採用することになった。

その機械の設計に愛知県出身の志水節夫氏（日大工科出身）があたり、実験は二人の担当であった。実験場は北京西郊飛行場の格納庫の一部を使い、機械を据え作業に入る。数回の実験の後、精製されたものを飛行機に実際に使用する。高度三千メートルを飛ばし、結果は良好である。早速工場を天津に建てることになり、北京との間を往復して建設にかかる。

完成は二十年八月末と決め、急ピッチを進める。実験場も拡充され、生産体制が整備される。その頃、飛行場では沖繩に出撃する特攻隊の訓練が日夜行われ、時には急降下しつつ、地上に突入する練習機もあり、戦況は日々厳しさが増すことが伝えられた。

八月十五日正午、飛行場の中の集会場に全従業員の

集合が行われ、訓練中の特攻隊員も参加して、ラジオの放送を聞いた。電波の関係で、音が乱れてハッキリしないが日本は敗れたのである。泣き崩れる老人、茫然自失、骨の芯の力が抜けてゆく。

異郷の地で迎える敗戦、今後どうなるのか、会社は十一月末を待って閉鎖と告げられ、翌日より整理に入る。天津の工場の片づけがすむと、済南・青島出張を命ぜられ、小型飛行機で飛ぶ。大陸の空は平穏である。済南から青島に向う途中、アメリカのB 29の大型機より食糧・医薬品がパラシュートで降下する模様は花が一時に咲いたようであった。青島はなんの異変もない、平和そのものである。所長からカニの馳走を受ける。街はにぎわっていた。

北京に帰ると、資材の引き渡しである。二十余人の社員がこれにあたり、重慶より到着した中国空軍の楊少佐に渡す。一切のリストの作成である。膨大な資材を品目別に数量を記入して提出するのであるが、一度で終らず、二度三度と品目と数量を書き替えて提出させられた。

我々は命ぜられたことを行うのであるが、中国国民党の腐敗を現実に示すものと理解した。十一月に入ると、邦人の引揚げと同時に社員の見揚も始まる。我々は会社の整理を終って最終組で見揚げるため、居残ることになる。幸い私は単身赴任で身軽であつて、その点は安心であつた。

十二月に入ると、多くの社員は見揚げ、我々は中国空軍に留用ときまり、仕事を続ける。当時の北京は、治安はさほど悪くはなかつたが、以前同僚であつた山形県出身の斎藤君が夜半強盗に襲われ、家族を守つて十数カ所刺されて死亡した。家族の帰国するのを見送つた時は胸を裂く哀れと深い悲しみを味わつた。

年を越し、二月末中国側の解除があり、副総裁をはじめ、居残つた全員が帰国することになり、北京を三月下旬出発、塘沽で乗船を待つ。収容所の野天には通過する人達が残したと思われる家財道具が山と積まれ、雨に濡れている。乗船名簿を作成して提出、四月に乗船ときまる。途中旅順の沖合と思われる附近で連艇の臨検を受ける。後程分かつたが、軍人の有無を

取調べたという。船には、女と子供と年輩の男が多かつたので、なんら問題なく釈放され佐世保に入港した。日本は新緑の候、実にきれいだ。帰国した感慨がひとしお身にしみる。四月十八日、早朝名古屋に降りる。私の青春の七年近くを過ごした北京での生活は終る。今、故郷に帰る。明日からのきびしい苦難が待っている。全生活をかけ、国家の尖兵として報国の七年間、報いは何であつたのか。

私の体験

大分県 大塚 覚

昭和十五年九月上旬、燃ゆる闘志を胸に秘め、決意も新たに上海航路長崎丸の客となり、長崎港を出港、二十四時間の船旅で上海の波止場に降り立つた。

途中船中では二度と踏むこともないかも知れぬ祖国の山々を視界から消え去るまで一人上甲板で感慨無量の想いで網膜に焼付けたのも昨日の出来事のような気